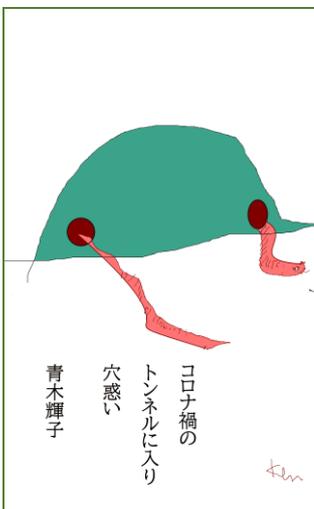


高鉞よろけて柿の空掴む

棕本望生

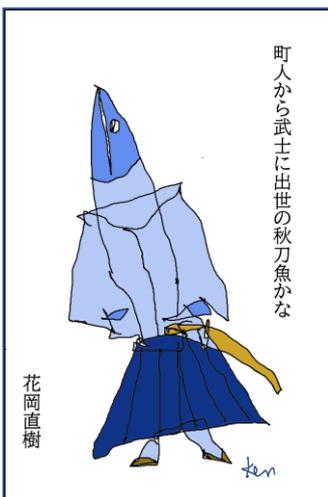
高鉞は使い方が難しい。何事も経験がモノを言うんじゃ。逆光はいかん。爺のやり方を見ておれよ。おととと、柿を採り損ねて空を掴んだわい。



コロナ禍のトンネルに入り穴惑い

青木輝子

ほほう、これは新型の穴だな。探した甲斐があるというものだ。あれれ、この穴は奥が深いぞ。ああ、新型コロナのトンネルか。どうりで先が見えん。



町人から武士に出世の秋刀魚かな

花岡直樹

皆の者、控えおろう。店頭には秋刀魚様がお出ましじゃ。これまで食い散らかされて辛い思いをしたが価格も高騰、今や目黒の秋刀魚の名に恥じぬ。



ピーマンと不仲の兄や唐辛子

岡田廣江

お前たちは元々兄弟なのだ。DNAが同じだ。見た目は異なれど、それぞれに良さがある。喧嘩両成敗だが唐辛子に辛い点をつけさせてもらうぞ。



簡単な話もつれる夜長かな

藤森荘吉

「夜長」は豊かさのあるプラスイメージの季語。しかし、現実には時間的余裕があるばかりに、めんどろな展開に。「厄介な話をするなら短夜に」。



似て非なる余命と余生敬老日

田村米生

余生を楽しもうと思っていたら、余命いくばくもないということもある。かと言って余命だけを気遣う余生というのも情けない。